3-1-3　史跡指定地ごとの地形概要

下里・青山板碑製作遺跡のうち、割谷地区、西坂下前Ａ地区、内寒沢地区の地形の現況調査（調査日：平成 27 年 10 月 28 日）の成果を整理する。

また、各地区における地形区分図などを示す。

割谷地区について

割谷地区の地形について、区分して概要を示す。

前面斜面（図 11-1　区分 1・写真①）

ズリ平場の前面斜面の傾斜角は急であるが、特に崩れや崩落の痕跡は見られない。ズリ平場面下部のズリの堆積は安定しており、地盤が良いと思われる。雨滴や霜柱などによる、土壌匍行が持続的に起きていると推定される。

※土壌匍行…土壌が少しずつ斜面の下方へ移動すること。

ズリ平場面（図 11-1　区分 2・写真②）

ズリ平場は植物に覆われていないが、平坦部分が多く傾斜が小さい。そのため雨滴による土の流出は生じるものの、表面の礫や土等の移動は比較的起こりにくいと考えられる。

崖錐堆積地（図 11-1　区分 3・写真③）

崖錐堆積地は石材採掘と風化岩片の落下によって形成された地形で不安定な斜面である。トレンチの中には斜面上部の切場斜面から崩落したと考えられるボウルダーサイズ（直径 256 ㎜より大きいサイズ）の礫が確認でき、持続的に礫生産と落下堆積が起こっていると考えられる。

切場斜面（図 11-1　区分 4・写真④）

石材採掘に伴う斜面では母岩が露出している。クラックが発達しており、落下の危険性が高い礫が浮いた状態にあることが確認できる。

堰堤域（図 11-1　区分 5・写真⑤）

もとはズリ平場・ズリ斜面が続いていたが、昭和 30 年代の大規模な採石で窪地状になっている。そのため、ズリ平場の北側は平均傾斜が約 80°以上で既に遺構面がオーバーハングしており、崩落の危険性がある。この窪地をポケットにするように平成 12 年に砂防ダムが建設された。満砂となった場合、ズリ山の一部や露頭が埋没することになるが、現在堤内に沢の上流からの土砂の流入はほとんどない。ダム建設による遺構への影響は袖の一部を除いてほとんどない。

堆積面（推定）/（図 11-1　区分 6・写真⑥）

上流から続く谷が人工的に埋積された堆積面と推定される。堆積面とズリ平場面がほぼ同じレベルでつながっているため、上流の谷がここでなくなり平坦面となっている。上流で崩壊・土石流が発生した場合、ズリ平場面・堆積面に土砂等の流入が発生することが予想される。

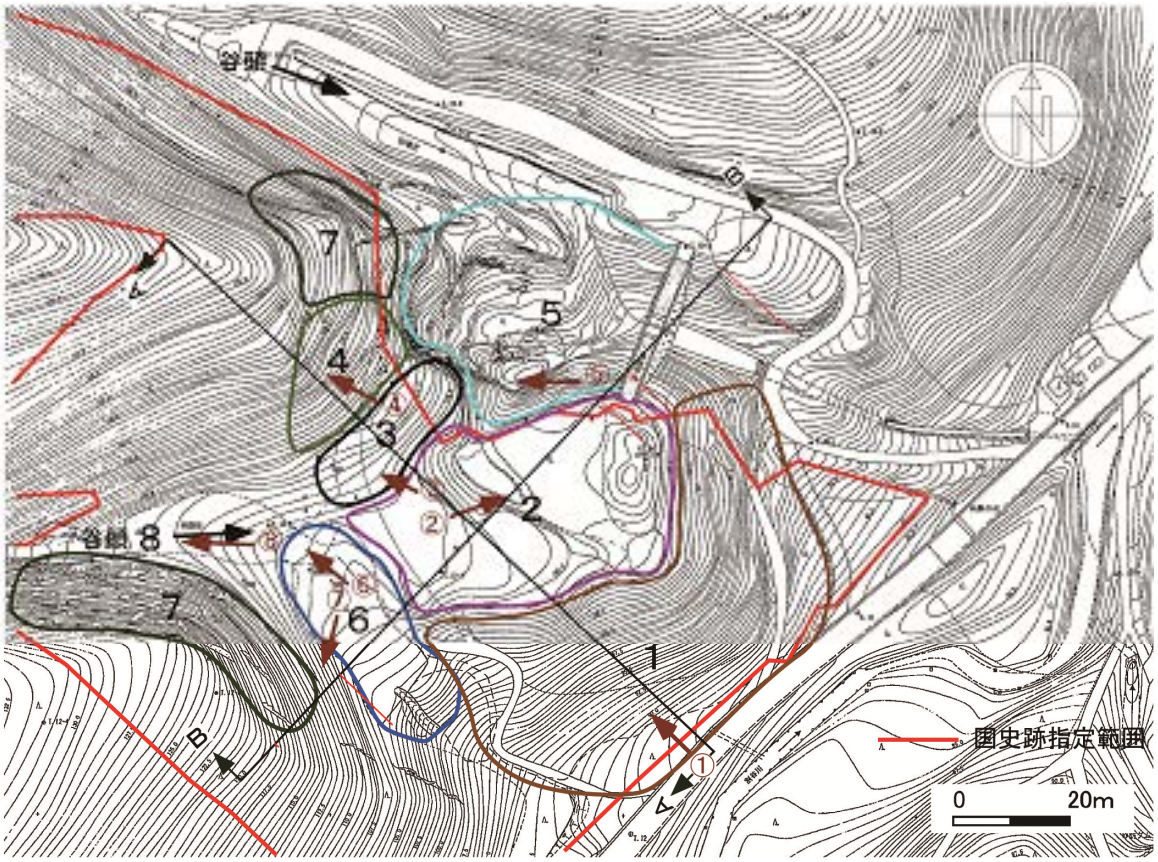
露頭斜面（自然露頭）（図 11-1　区分 7・写真⑦）

露頭のクラックが発達した状況が確認できる。

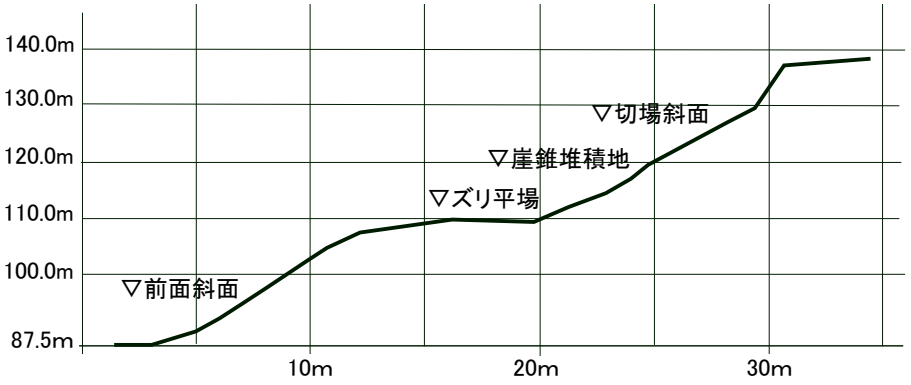
谷（図 11-1　区分 8・写真⑧）

谷の長さも集水面積も狭いが、その分土砂堆積量が多いと思われる。

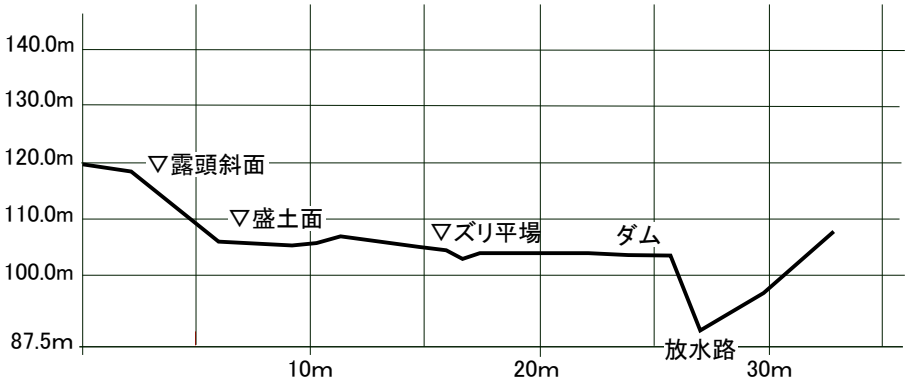
■図 11-1　地形区分図（〇数字は写真撮影方向を示す）



■図 11-2　現況地形のＡ－Ａ’断面



■図 11-3　現況地形のＢ－Ｂ’断面



西坂下前Ａ地区について

西坂下前Ａ地区の地形について、区分して概要を示す。

前面斜面（図 12-1　区分 1-Ａ・写真①）

ズリ平場の前面斜面の傾斜角は急であるが、特に崩れや崩落の痕跡は見られない。ズリ平場面下部のズリの堆積・散乱が見られるが、地盤が比較的安定していると思われる。

前面斜面（図 12-1　区分 1-Ｂ・写真②）

傾斜角は急であるが現況は崩落の痕跡は見られない。ズリの堆積は割谷地区に比べて不安定であると思われる。

ズリ平場面（図 12-1　区分 2・写真③）

ズリ平場周辺は、地表面は若干の植被があり、ズリが散乱している。ズリ山は一つ一つの凹凸が大きく、傾斜もある。また、切場斜面からの落石は１ｍ四方程度の大きさのものもあり、平場には２個落下していた。

植林があり、雨滴や霜柱などによる土壌匍行が起きにくい状態で保存状態が良い。

切場斜面（図 12-1　区分 4・写真④）

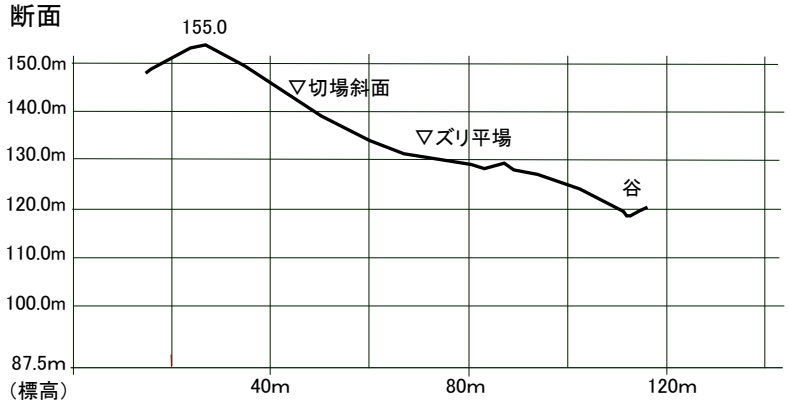
切場斜面では、露頭が所々に見られいずれもクラックが発達している。斜面下部にはっきりしないが崖錐堆積と思われる地形が見られる。斜面を植被がカバーしており、地形保存の役目を果たしている。

谷（図 12-1　区分 8・写真⑤）

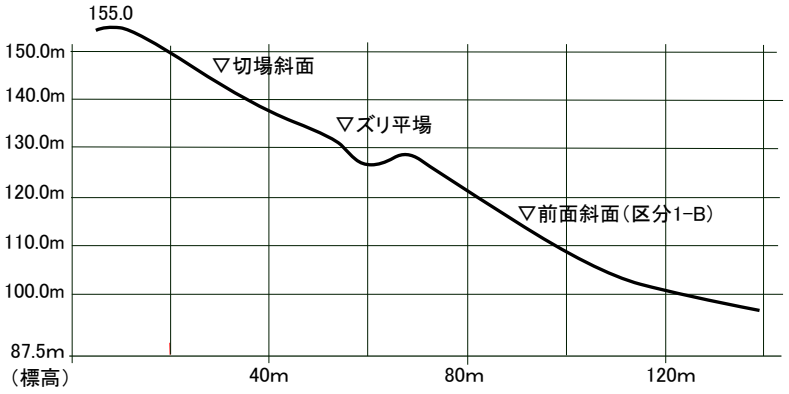
上流までの谷の長さもあり、かつ勾配（こうばい）も強い。

■図 12-1　地形区分図（〇数字は写真撮影方向を示す）

■図 12-2　現況地形のＡ－Ａ’断面



■図 12-3　現況地形のＢ－Ｂ’断面



内寒沢地区について

内寒沢地区の地形について、区分して概要を示す。

前面斜面（図 13-1　区分 1・写真①）

ズリ平場の前面斜面の傾斜角は急であるが、特に崩れや崩落の痕跡は見られない。しかし、ズリが散乱しているところから、雨滴や霜柱などによる土壌匍行が持続的に起きていると推定される。

ズリ平場面（図 13-1　区分 2・写真②）

ズリ平場周辺は、樹木が密生しており、見通しがきかない。地表面は若干の植被があり、ズリが散乱している。雨滴、霜柱などによる土壌匍行が起きにくい状態で保存状態が良い。

崖錐斜面（図 13-1　区分 3・写真③）

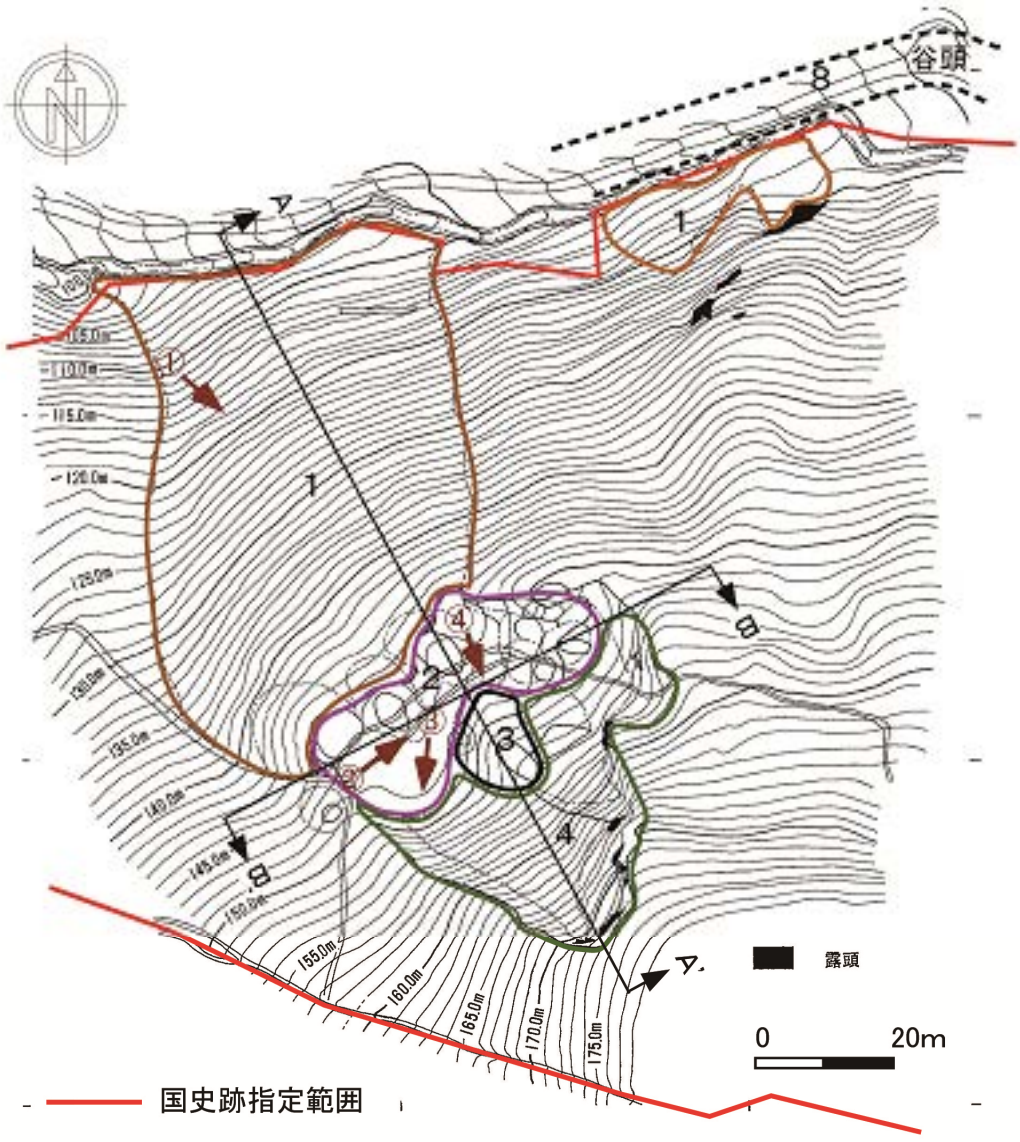
斜面上部より生産された礫が堆積した崖錐地形がある。ほぼ植被に覆われているが、表面には新しい落石が数個見られ、礫生産が続いていることが確認できる。

切場斜面（図 13-1　区分 4・写真④）

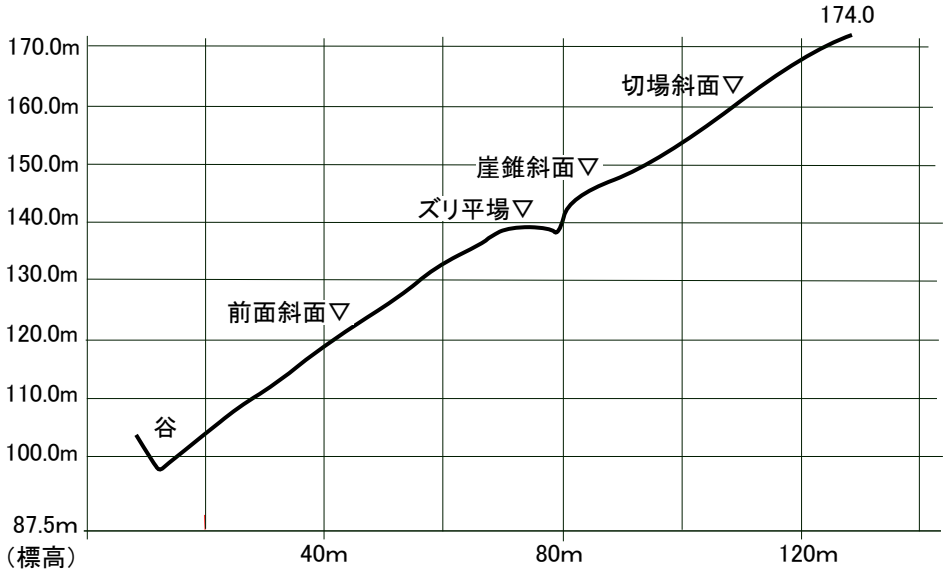
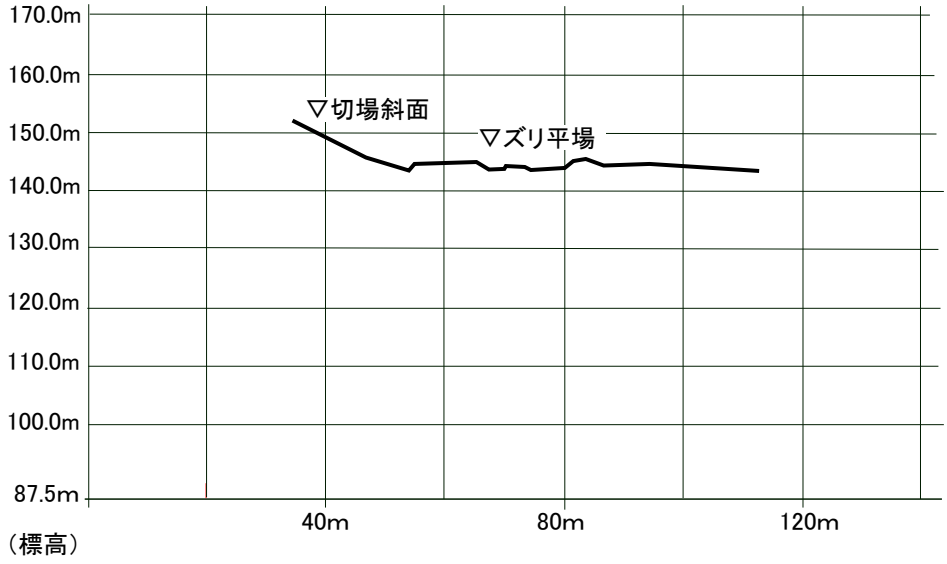
切場斜面では露頭が所々に見られ、斜面下部には崖錐堆積地形が見られる。斜面西側端は、植被が少なく礫移動が起こりやすい状態となっているほか、露頭はクラックが発達し、落下の可能性をうかがわせている。

また、斜面地上部の山道は浸食が進み、浅いガリー（雨水が集まった流れで地表面が削られてできた地形）が見られる。

■図 13-1　地形区分図（〇数字は写真撮影方向を示す）



■図 13-2　現況地形のＡ－Ａ’断面



■図 13-3　現況地形のＢ－Ｂ’断面